

---

# 永遠の夜

咲羅蒼士

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

永遠の夜

### 【Nコード】

N4305N

### 【作者名】

咲羅蒼士

### 【あらすじ】

衛都歴2201年

ここは、サムライが国を治める世界、  
陽国<sup>ヒクニ</sup>

その中心都市、衛都

衛る都と書いてエドと読む

いつかどこかで見た事があるような、  
聞いた事あるようなそんな世

界のお話

はたまた過去の事かもしれないし、未来の事なのかもしれない世界のお話

そんな国の中心、衛都……から少し離れた山間の茶屋

このお話は、この名も無き一軒の茶屋から始まる

## プロローグ（前書き）

初投稿となります。ので、駄文が気になるかと思えます（あと誤字脱字）が、何しろシロートなんでなっがぁーい目で見てくたさいませ。

## プロローグ

衛都歴2201年

ここは、サムライが国を治める世界、  
陽国<sup>ヒクニ</sup>

その中心都市、衛都  
衛る都と書いてエドと読む

いつかどこかで見た事があるような、聞いた事あるようなそんな世界のお話

はたまた過去の事かもしれないし、未来の事なのかもしれない世界のお話

そんな国の中心、衛都……から少し離れた山間の茶屋

このお話は、この名も無き一軒の茶屋から始まる

ガシャーン！という瀬戸物が割れる音と男の怒号

旅人の一時の安らぎを与える茶屋には似つかわしくない光景があった

「何？だんごが無いだとお！？ふざけんなっ！！」

「その男には出すだんごがあつて、俺達には無いだと！？ああ？」

「も、申し訳ありません。只今お作りしてますので今しばらくお待ちくださいたく……」

「うるせえ！こっちは腹減つてんだよさっさと持つてこい！」

店の主人が頭を下げ詫びているのに、男達は聞く耳持たず益々怒鳴りちらしていた

「て、店長……」

「き、君はいいから、早くだんごを作つて」

「は、はい」

奥から出て来た従業員と思われる娘を見た男達は顔色を変えた

「おう、待てやネエちゃん」

「は……はい？」

「お前えカワイイ顔してんなあ」

「あ……あの……」

「おい主、気が変わった。この場、鎮めてやってもいいぜ」

「え？」

「代わりにその女が俺達の相手をしてくれればの話だがなあ」

「そ、そんな」

その言葉に主人と売り子の表情が陰った

「さあ、どつする」

「そ、そればかりはご勘弁を」

「交渉決裂、だな。おう！お前らこんな店潰しちまえ」  
『おおっ！』

手下の男達が店の潰しに掛かった時

「ぎゃあっ！」

悲鳴を上げたのは男の腕には竹串が刺さっていた

「だ、誰だっ！！」

返事をするものはいなかったが、最後のだんごを買って食べていた  
”やさ男”が手をあげた

「てめえがやったのか、ああ？」

「いやあ、ご主人だんご旨かったよいい仕事してるね」

「はあ、ありがとうございます…」

「なにより、たれが旨いねえこりや売れるわけだ」

その会話を聞いて男達は青筋たてている

「この野郎！人の話をききやがれっ」

痺れを切らした頭と見られる男が”やさ男”目掛けて刀を振り降ろした

その場にいた者達は”やさ男”は斬られたと思っていた…が、  
”やさ男”は立っていた

そして男が振り降ろしたはずの刀が、手から無くなっていた

「危ないだろ、刀なんか振り降ろしたら」

刀は、まるで手品の瞬間移動のように”やさ男”の手にあった

「ば、馬鹿な…」

「まったく、こんな危ないことするんなら刀は…」

”やさ男”は刀を地面に突き刺した

「使えなくしてやるよ」

地面には柄から鏝までしか突き出ていなかった。  
綺麗に刀身だけが地面に収まっていた。地面から柄が生えているかのように

「さあ、刀が欲しければ抜いて持って行くんだな」

”抜けるはずが無い”誰もがそう確信していた。案の定その場にいる男達全員が試したが抜ける気配すらなかった  
諦めた男は手下を連れて去って行った

「クツ覚えてるよ、このくそガキ！テメエら行くぞ！！」

「あ、ありがとうございます。なんと御礼を申し上げたらよいか」

「いや俺なんもしてないし」

「何か御礼を」

「いいっていいって」

「それでは私達の気がおさまりません」

「そ、そう？あっ！じゃあだんこの代金タダにして」

”やさ男”…では可哀相なので、そろそろ名前をお教えしましょう

このお話しの一応の主人公（文無し）

職業はサムライ、年の頃は17。



髪の色は血の色が如き紅、その為か名を真紅郎と申します。

愛刀”翔迅丸”を腰に差し国一番のサムライとなるべく只今全国行  
脚中の身

以後よろしくお願いいたし候。

## プロローグ（後書き）

ここまで読んでくれてありがとうございます（――）

― 応まだ続きます

## 一話（前書き）

ここからが本編になります

## 一話

グウ~~~~

「あー…腹あ減ったなあ。さすがに団子一本じゃ足りねえかあ」

人間、限界に到達すると理性が無くなるもので変な事を考えてしまっ

「スリ…とか追剥ぎ…とかやるしかないかな…い、いやいやっ

！それでもサムライの端くれ、さすがにスリは…」

「す、スリだあ！」

「何っ！！俺はまだやつちやいないぞっ！！言葉には出したかもだが…まだ実行に移しては…」

「誰かあ！捕まえてくれっ」

「おつ俺じゃあないみたいだなっと」

真紅郎は追剥ぎの前に立ち塞がった

「こっから先は行かせねえぞ、観念して財布を渡…」

最後まで言い終わる前にスリは真紅郎の後ろにいた

「じゃあね、うすのろザムライ」

真紅郎があっけにとられている隙に走り去って行った

「ありや韋駄天か？」

「お、お侍様スリは？」

「悪い逃げられた」

「参ったなあ…あの荷物にや路銀が全部入ってたのに」

(路銀！？)

「い、いくら入ってたんだ？」

「へえ、2両ほど」

「に、2両っ！？なあ兄さん、この俺が取り返してやるっか」

「えっ！？本当ですかい？お願いします、御礼は致しますので」

「よし、その言葉二言はないな。そこで待っときな」

真紅郎は目を輝かせながらスリを追いかけた

「2両か…結構入ってるじゃないか。良い衣紋着てたしな」

「確かに2両だな」

「ああ……って、あんたいつの間に!？」

「その2両、貰いに来た」

「そう言われて簡単に渡すかよ」

「ま、そうだろうな。だが、こつちも今日の飯の為に来てんだからな」

「は？飯？」

「じゃなくて…可哀相な人を助ける為に来てんだからな」

「……………」

「財布と2両、すぐに渡せば手荒な事はしねえし番所にも突き出さねえから。さあ渡しな」

「イ、ヤ、ダ、ネ」

(怒)

「欲しけりや腕ずくで来るんだね。”ウスノロ”」

ブツッ

「おいガキ…大人をからかうんじゃねえぞ…」

「切れたのか？」ウスノロザムライ”」

「痛い目みねえとわかんねえようだなあ…後悔すんなよ!」

スリ目掛けて飛び掛かったが、相手は真紅郎の頭を飛び越えた

「やっぱりウスノロだ」

「ウスノロ言うなっ!」

「やい！降りて来やがれっ！臆病者！」

「（ムッ！！）臆病者じゃない」

「木の上に逃げといてよく言うぜ臆病者！」

「だから、臆病者じゃないって言ってるだろ！」

スリは短刀を抜いてかかってきた

「へっ！やりや出来んじゃん」

「うるさいっ！」

「そろそろ本気で止めるぞ」

「やああっ！！！！！」

真紅郎が攻撃を避けるとスリは着地に失敗し、よろけた

「しまった！！」

気付くのが遅かった。そこが崖であつた事を

「！！！」

そのままスリは崖下に真つ逆様：とはならなかつた

「っ！？」

落ちる寸前スリの腕を掴んでいた

「あんた、何やってるんだ……」

「話し……かけ、る……な」

「離せっ……お前に私を助ける義理はないだろ」

「……………ぐうっっ」

「財布と金ならさっきの木のうだ。だから、離せ……お前も落ちるぞ」

「……る……っせえ！」

「お前……」

「もう…誰も…死…なせねえ、つて誓つ…たんだよつ！」  
「うおおおつっ！！！」この時スリの目に真紅郎の紅髪がより赤く輝いたように見えた

しばらくしてスリが気が付くと真紅郎の姿は財布と共に無くなって  
いた

「変なやつ…だったな」

「助かりました本当にありがとうございます。あ…衛都に行かれる  
んですよね？でしたらこの書状を富永屋という旅籠の女将にお見せ  
ください。御礼はその女将が」

「あ、そうなの？（路銀からはくれないのか）わかった」

「では、私はこれで」

「お、おう。気をつけて」

男は深々と頭を下げ真紅郎とは反対方向に歩いていった

「書状じゃ腹は膨れねえよな…はあ…：…腹減ったあ」

またフラフラと衛都に向かって歩き出したが、しばらくすると誰か  
に呼び止められた

「あ？」

「やっと思つけたぞ」

歳は15、6の若い娘だった

「なんか用か？」

「私は葵。お前の名は？」

「し、真紅郎……」

「真紅郎……か」

「なんだ？」

「お前には借りができたからな。返すまで一緒に行く事にした」

わけがわからなかった。こんな若い娘に貸しを作った覚えがない

「人違いだ。じゃあな」

「待て！人違いじゃない！お前で良いんだ。……まだわからないのか

”ウスノロザムライ”」

その言葉に全てが繋がった

「ま、まさか……さっきのスリのガキ?!」

「ガキじゃないし」

葵の顔をまじまじと見つめた

「お前……」

「な、なんだ？」

「もしかして、女……か？」

「は?……まさか……今まで男だと思ってたのか」

「うん」

「貴様……(怒)」

「まてまて、怒るな仕方ないだろ！頭からマント被ってたら誰だつてわかんねえよっ」

「くっ……まあいいだろう」

「んで?なんだよ、心配すんな番所にはつきださねえから」

「違う」

「だったら何の用だ、腹へって気がたつてるんだ早く用件を言え」

「お前、衛都に行くのか」



「そうだけど？」

「なら、私も行く」

「ああそう……は？今なんつった」

「お前には借りが出来た……必ず借りは返す」

「いらねえよ。つーか何の借りだ？お前に借りを作った覚えはねえぞ」

「なんと言おうと付いて行くからな。でなければしの……私のプライドが許さないから」

「あーあー！もーわかつたから、そこ退いてくれ腹減ってんだって言つたろ？一刻も早くこの紙を礼金に変えないと飢え死にしそうなんだよっ」

真紅郎はさつき貰った書状を出した

「なんだ腹が減ってるなら、私の御握りを食べるか？干し肉もあるが」

「マジかっ!？」

竹の皮で出来た包みを真紅郎の前に出した途端目の色が変わった

「い、いいのか。本当にいいのか！」

「ああ、構わないぞ」

「み、三日ぶりの米だあ……いただきますっ!!」

ものすごい勢いで食べ始めた

「本当にギリギリ飢え死に寸前だったんだな……」

「っはあゝ旨かったあご馳走さまでした。いやあ助かったマジで、ありがとう。お前いいやつだな」

「い、いや良いんだ。気にするな」

「さてと、そろそろ行くか」

「…そうか…行くのか」

「ん？なにやってんだ、さっさと行くぞ」

「え、いいのか？行っても」

「旅は道連れ”ってな。サムライは一度受けた恩は生涯忘れないんだ。たとえ握り飯一個でもな」

「サムライ…」

「日が暮れるまで衛都に着かなきゃならねえんだ。早くしないと置いてくからな”葵”」

その言葉に一瞬で顔がほころびた

”葵”

「ま…待ってくれ”真紅郎”！」

とんだ成り行きで旅の仲間が出来た真紅郎

まだまだ旅は始まったばかり

一体、これからどんな試練が待構えているのやら

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4305n/>

---

永遠の夜

2010年10月9日19時12分発行